

それぞれの最終楽章

助け合いの町で ③

死が身近であるからこそ、生を感じる場面があります。

95歳で亡くなった芳子さんは、緑内障以外は、血圧が少し高い程度。幼稚園児から中学生までのひ孫が同じ敷地に住み、幼いひ孫の子守もする。かつて手芸の先生もしていた、部屋には孫につくった手まりやマフラーがありました。

足の力が弱り、外出が難しくなったため、亡くなる前年の5月から月に1度の訪問診療を始めました。夫を病院で見送ったこともあり、「食べられなくなったら、だんない(もういい)わ。何もしてほしくない」と意思は明確です。徐々に目が見えづらくなりましたが「なかなか死ぬませんわ」と笑顔です。秋から訪問入浴などの介護サービスを使い始め、冬に入る頃は、食事はゼリーやバナナが中心に。「世話になるけど家にいたい」と、自宅での最期を強く望んでいました。年明けからは1日にアメ2個と水分が少し。「死ぬことばかり考えてる」と笑っていましたが、家族も含め死の話題を避けないで

ひ孫へ 日常が静かな命のリレー



永源寺診療所長 花戸貴司さん

1970年滋賀県生まれ。自治医科大卒。大学病院勤務などを経て、2000年から現職。著書に『最期も笑顔で』など。16年、へき地の若手医師を顕彰する第3回やぶ医者大賞受賞。

対話していると、切羽詰まった感じがなくなり、2月に入るとほとんど食べられなくなり、22日に血圧も測れなくなりました。それでも毎日、ひ孫さんたちが枕元に集まり、にぎやかに過ごしていたそうです。25日、娘さんから「息を引き取ったようです」との連絡で駆けつけ、心臓も呼吸も止まっていることを確認し「大往生です」と告げました。

死に化粧や着替えの時も、ひ孫さんたちは枕元にいました。「口紅をきれいに塗ってあげて。あっちでおいちちゃんが驚くように」。手をさすっていたひ孫は「さっきより、冷たくなってわ」。それぞれが芳子さんの死を見つめています。少し前まで一緒にお菓子を食べ、遊んでくれたひいおばあちゃんが、だんだん弱り、目が見えなくなり、

ついには何も食べられなくなって、苦しまず静かに旅立っていく。目の前で展開される生老病死を見ながら、命のリレーを体験しています。芳子さんの死亡診断書の死因に、私は「老衰」と書き入れました。毎年、私が看取る人の半数は老衰です。病院の先生は、老衰と書くのをいやがります。ある時、研修医が「老衰って、どう診断するのですか」と聞いてきました。私も病院勤務の頃は「老衰と書くのは、病気が発見できなかったヤブ医者のこと」と教えられました。

しかし「老衰」の診断書でも、長くその患者さんの老病死を見てきた家族やご近所さんは「大往生。これは老衰だ」と納得します。「老衰」は、検査で診断するのではなく、周囲の皆さんと納得すること。人生に寄り添ったかかりつけ医だからこそ、老衰と診断できるのだと思います。

(構成・畑川剛毅) Ⅱ全6回

朝日新聞デジタルの医療サイト「アピタル」で、より詳しくご覧になれます。